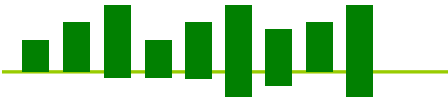


ダルニー通信





タイ奨学金の締め切りは3月21日 必要とされる奨学金

日本とタイの事務局は現在、2008年5月に進級・進学予定の子どもたちに提供する奨学金の募金に全力をあげています。多くのタイ東北地方の子どもたちは困難な状況にもめげず、勉強を続けたいと願っています。一方、奨学金は残念ながら不足しており、奨学金を必要とする子どもたちを目の前にしながらも提供できないと現場の先生方からの悲痛な声が届きます。まだ間に合います、子どもたちが少なくとも基本的な教育の機会を得られますように、どうか一口でも多くの奨学金を子どもたちに届けさせてください。



奨学生候補宅を訪問して励ますタイの先生(写真右)

格差を体現するタイ東北地方

格差社会といわれる昨今ですが、20年前にダルニー奨学金を開始した当初より、当センターはタイ東北地方とバンコクを中心とする首都圏との収入格差を注視してきました。当時の調査ではタイ東北地方と首都圏との年間平均収入は10倍にもものぼる格差があり、年収1万円に満たない家庭も多く、たくさん子どもたちが中学進学をあきらめなければならない状況でした。その中でダルニー奨学金は多くの子どもたちの就学を後押しして、タイの教育拡充政策ともあいまって就学率の向上に大きく寄与しました。ではタイの子どもたちをとりまく状況は改善されたのでしょうか。奨学金

提供開始以来15年ほど経過した2003年、タイ国立統計局の地域別月収・支出統計(2000年)をもとに算出したところ、平均年収はバンコク首都圏で約80万円、東北地方で約26万円と出ました。では、格差は縮小したと手放しで喜んでよいのでしょうか。実際に村や奨学生の家を訪問し、調査や奨学金提供状況の確認をしているタイ事務局員や奨学生の面倒をみてくださっている先生方にはそんな実感は到底わかりません。2002年に中学へ進学したいと提出された6,178通の奨学金申請書に記載された家庭年収からタイ事務局(EDF:財団法人地域開発教育基金)が奨学生の家庭の平均年収を計算すると、約2万円でした。逆に奨学金を必要とする子どもたちにとって格差は拡大し、困難は増しているのです。現在はさらに格差が多様化し、拡大しています。最近の傾向では、申請書内の家庭の借金の額が増大しています。借金返済のために出稼ぎにいかねばいけない子どもたちも多いのです。一見豊かになったようなタイ東北地方も、実は大変な状況に陥っているのです。

奨学金の役割は支援にととまらず

タイはすでに発展しているから自国のことは自国でやって欲しい、自力で奨学金をまかなって欲しいという意見を耳にします。自立を促すようで一見もっともなように思われます。でもそれで良いのでしょうか。あまりにもダルニー奨学金の役割を一面的にしか見ていないのではないのでしょうか。

多くの奨学生の言葉や元奨学生の証言にあるように「誰かが見守ってくれている」、「誰かが気遣ってくれている」ことが彼らを力づけたのです。何よりも力づけられるのは、国の枠を超えた皆さんの子どもたちへの理解とご協力です。

一方、「奨学生の生活を知り、貧しかったけれど夢のあった昔を思い起こした」とおっしゃる方、「困難な中でも学校へ行きたい、勉強したいという子どもたちがいることを知って、考えさせられた」という書き損じはがきを集めてくれた生徒さん、「奨学金を通してタイのことに関心を持つようになった。同時に日本の現状を考え直すきっかけとなった」とおっしゃるドナーがいっぱいます。

このように奨学金は同じ時代、同じ地球に住む人々の思いをつなぎます。これからますます大切になる相互理解、それを守り育てるダルニー奨学金へ引き続きのご支援を是非お願いします。

タイ事務局レポート

13 歳の奨学生の厳しい現実 両親からの連絡は途絶え、お祖母さんが 唯一の働き手

研修旅行でタイ東北地方の農村を訪れると、時々、親のいない家庭を見かけます。両親ともに出稼ぎに出てしまい、祖父母と一緒に、子どもだけで暮らしています。スラチャイはお祖父さんがしょうがいを持っているため働けず、お祖母さんが生活を支えています。奨学金でどうにか学校に通っていますが、生きざりぎりの生活です。

火鉢の火がめらめらと燃え、板切れでできた家の壁の割れ目にオレンジの光を放っていました。暗い部屋の片隅では、目覚めたばかりの、痩せて小柄な少年が目を開けたばかりです。しばらくして暗さに目が慣れるとゆっくり布団から離れ、布団をたたんでテーブルの上に置きました。風が部屋に入り込み、その少年は寒さに肩をすぼめました。

ドアを開けると、外では 70 歳になるお祖母さんが近くの池でとった数匹の小魚と野草で朝食を作っていました。しかし、他人の目には、彼女が料理をしているようには見えなかったかもしれません。というのも、彼女が持っている台所用品は古い鍋 1 つと色あせたスプーン 1 つだけだったからです。少年は寒かったのでおばあさんの横に座り、ストーブの前で暖を取りました。

しかし、そのストーブの火も、少年の心に吹いている冷たい風を取り除くことは出来ませんでした。

ナコンラーチャシーマー県に住むスラチャイ・セーハムは今年 13 歳。両親はスラチャイが小さいときに離婚し、現在、お祖母さんとしょうがいを持つお祖父さんと 3 人暮らしです。

「家族のために、お祖母さんはどんな仕事でも請け負います。それで、ボクは時々学校に行くのが嫌になります。だって、家にはお金がなく、ボクとお祖父さんの面倒を見るために、お祖母さんがとてもきつい仕事をしているからです。でもその一方で、お祖母さんの働く姿を見て、ボクも学校で一生懸命勉強しなければ、と思います。そして大きくなったら、お祖母さんに楽をさせたいと思います。今、少しでもお祖母さんを助けるため、1 日たった 20~30 バーツしかもらえないような仕事をします。ボクの家では、今日、仕事がないということは食べる物もない、ということの意味です」

スラチャイはダルニー奨学生です。生活は苦しいのですが、奨学金のお陰で学校に行くことができ、将来の夢を持ち続けることができていると感じています。「奨学金をもらうことで、お祖母さんの負担が軽くなりました。奨学生なら当然ですが、奨学金を出し



学校で制服姿のスラチャイ（下）。炭にする薪を集め、家の収入を助けている（左）



てくれた人の期待に応えるためにも、一生懸命勉強しなければと思います。将来は兵士になりたいと思っています。国の平和を守りたいからです。兵士の勇敢さを見ていると、故郷、自分の信じる宗教、国王を愛する気持ちが強くなっていくのを感じます」

タイ東北地方の奨学生の家庭

タイ東北地方では、特に貧しい家庭の親は出稼ぎに出ることが多く、しかも両親が 2 人とも出稼ぎに出るケースも決して珍しくありません。4 年前、マハーサーラカム県の奨学生宅を訪問しましたが、その中 2 のワンの親は、彼女が小さいときに、出稼ぎに行き、一度も家に帰ってこないそうです。彼女は「もう両親の顔も忘れそうです」と悲しそうな顔でポツリとつぶやいていました。家には寝たきりのおばあさんと小 5 の弟がいて、彼女が 2 人の面倒を見ていました。両親からは時々 2,000 バーツ（約 6,600 円）のお金を送ってくるそうです。

ワンの場合、それでも両親が時々 2,000 バーツのお金を送ってくれるので、それで何とか生活できるようですが、まったく仕送りをしない親もいます。特に、出稼ぎ先で両親が別々に暮らし、それが原因で離婚した場合、たいていは、それぞれに新しい家庭をつくっているため、仕送りをしない・できないようです。こうなると、仕送りがなくて生活ができないだけでなく、親に忘れられた（捨てられた）ことが心の深い傷になって、子どもは家に引きこもったり、麻薬などにおぼれたり、非行に走ったりします。

スラチャイの家族は、お祖母さんが必死で働くことでどうにか生活をしています。彼はお祖母さんの働く姿を見て、それを支えに懸命に学校に通っているように見えます。もしお祖母さんが働けなくなったら、スラチャイは学校を辞めて働かざるを得ないでしょう。しかし、中学を中退して働ける場所は限られています。

2008 年度タイ奨学金の締め切りは
3 月 21 日です。

ラオス事務局レポート：ラオス元奨学生 1 期生と 2 期生の「現在」

31 人中、高卒 8 名、中卒 18 名、農業従事者 13 名

教育を通じての地域の発展、長期的な目で見た支援継続が必要

昨年 11 月の 20 周年記念式典で日本に招へいするラオスの元奨学生を選ぶに当たり、ラオス事務局はまず 1 期生 70 名が通った学校の先生に彼らの消息を尋ねました。その段階で 2 人の候補者を選定した後（来日したダオサバイさんはその 1 人です）、東京事務局で作成したリストを元に 2 期生の元奨学生の調査も行い、1 期生・2 期生の合計 31 名（男性 18 名、女性 13 名）の「消息」結果が東京の事務局に届きました。調査対象地はカムアン県とセーコーン県です。

来日したダオサバイさんを除く 38 名の 1 期生・2 期生については、ラオス事務局長代行のカムヒアが一人ひとり彼らの学校や村を訪ねました。本人に直接会えた生徒は 18 名、本人には会えず、家族や先生に消息を聞くことが出来た生徒は 13 名（以上、合計 31 名）。全く消息が分からない生徒は 7 名でした。

さて、ラオスの義務教育は小学校までで、ラオス奨学金は小学校最後の 3 年間（3～5 年生）に提供されま
す。その後、彼らはどこまで勉強を続けたのでしょうか？

【調査結果：学歴】高校卒業 8 名、高校中退なし、
中学卒業 10 名（高校卒業 8 名も含めると 18 名）、中学
中退 3 名、小学校卒業 5 名、小学校中退なし、不明 5

この結果では、約 58%が中学を卒業し、約 25%が高校を卒業しています。奨学金を受ける子どもの家庭は経済的に貧しい家庭ですが、それでも奨学金で小学校を卒業すれば、小学校の卒業率約 40%のラオスで、高校まで卒業する子が 25%もいるということになります。この調査では大学に進学した人はいませんでしたが、その理由の 1 つとして、大学は都市部にしかなく、都市部に住むにはお金がかかるという問題があります。しかし、来日した 1 期生のダオサバイさんは教師養成カレッジに通っていました。彼以外にも、大学に進学した元奨学生がいるかもしれません。

現在の職業は農業従事者が多数

次に現在の職業について質問しました。

【調査結果：職業】農業 13 名、兵士 4 名、労働者 3
名、タイへの出稼ぎ者 2 名、先生 1 名、小売店主 1 名、
運転手 1 名、小学校に復学 1 名、無職 2 名、不明 3 名

回答者の約 42%が農業に従事していました。多分、家族と一緒に働いていると思われます。就業者の約 80%が農民の国で職業選択は非常に限られている状況を反映しています。農業従事者は農閑期や収穫が少ないときには、しばしば森に入って野草や木の实、昆虫などを捕まえたり、投げ縄や仕掛けをつかって川や池で魚を捕まえたりします。兵士が 4 名いました。タイでもそうですが、一般に民間企業が少ないラオスで



学校で勉強するラオスの子ども達

は公務員の地位が高く、先生や兵士、警察官などの公務員希望者は多いようです。労働者 3 名のうち 1 人は、今回来日したダオチャイさんで、日雇い契約で工場の食堂でコックとして働いています。もう 1 人は製材所で働いています。タイに出稼ぎに行っている元奨学生は男性と女性が 1 人ずつでした（どちらも学校の先生による回答でした）。

最後に将来の夢について、質問しました。

【調査結果：将来の希望】先生 5 名、医者 3 名、警官 1 名、電気技師 1 名、農業専門家 1 名、自動車修理工 1 人、分からない・回答無し 19 名

1 期生と 2 期生は 20 歳前後の年齢で、調査結果のとおり、5 名をのぞく 26 名の回答者が職業についていますが、調査結果から、現在の職業に満足できず、それとは違う仕事に就きたいと思っている人が多いようです。回答で「先生」が多い理由の 1 つは、地元の小学校の先生になれば、両親と一緒に住めるからです。「医者」も「両親や近所の人々が病気になるのに、病院に通えない」状況を見て、医者になりたいと思う子どもが多いようです。

ダルニー奨学金の目的は「地域の発展に貢献する人材の育成」ですが、今回の調査結果から、「地域の発展」にはまだまだ時間がかかることがわかりました。社会に教育の成果が現れるのに数世代を経る必要があるのかもしれない。また、奨学生個々に目を向ければ、結局、農業に従事するにしても、成長期に小学校を卒業して農業をするのと小学校に行かずに農業をするのでは、内面的に大きく違うはずで、今後とも長い目でラオスの子どもをご支援いただければ幸いです。

募金箱からの奨学金、455 口に！

現在、全国 76 箇所に設置していただいております募金箱からの奨学金が、4 年間で延べ 455 口になりました。“塵も積もれば山となる”と言われますが、仮に 1 人が 100 円を募金したとすると 45,500 人の方々にご協力いただいたこととなります。募金箱設置をご紹介いただいた方、設置し管理していただいている方、募金をしていただいた方、多くの皆様に心より感謝申し上げます。

当センターには、お貸し出しできる募金箱が出番を待っています。募金箱は募金のためだけでなく、多くの方にダルニー奨学金を知っていただくきっかけにもなります。皆様のお知り合いの店舗等、ぜひご紹介ください。募金箱設置にご協力頂ける場合は、事務局にご連絡ください。折り返し資料と申込書を送ります。

設置店の例：様々な工夫をされています！

グリーンツーリズム体験

手づくりの暮らし工房「山内農園」

ゆったりと流れる自然時間の中で、羊と遊んだり、紡糸・機織、ワイン・紅茶・竹細工づくりなどが体験できます(要予約)。同工房の会員は手作りコテージで宿泊もでき、宿泊費の 10% がラオス奨学金として募金されます。



〒437-0202 静岡県周智郡森町亀久保 296

TEL/FAX: 0538-87-0111

東名高速、掛川または袋井インターより約 1 時間

リサイクルオフィス家具 有限会社 平野商店

400 坪の店内に洗浄・修理された中古オフィス家具が並んでいます。その一角に、家具と一緒に引き取った事務用品を無料でお分けするサービス・コーナーを設け、そこに募金箱と書き損じはがきボックスを置いています(写真の真ん中が募金箱)。事務用品を無料でお持ちいただく代わりに募金をお願いしています。



〒189-0014 東京都東村山市本町 1-10-1

TEL 042-398-3920 FAX 042-398-3940

<http://www.hiranoshouten.net/>

(商品がご覧いただけます)

インクカートリッジ収集の報告とお願い

収集開始から 2 年 4 ヶ月で、約 850,000 円に！

ダルニー奨学金を 1 口でも多く、タイ・ラオス・カンボジアの子どもたちに贈るため、2005 年 9 月から開始されたインクカートリッジ収集による換金額合計が、07 年 12 月に 850,000 円を超えました！当センターまでインクカートリッジを送付、または持参して下さった方がたに心より御礼を申し上げます。

毎日のように各地から届くダンボール箱に詰まったインクカートリッジを、仕分け・集計して下さるのが、長年ドナーでかつ民際ボランティアの中村さんです。毎回中村さんが着けている透明ゴム手袋がさまざまな色のインクに染まっていますが、愚痴一つ言わず、黙々と仕分け・集計作業を続ける中村さんに感謝！個数買取が可能なインクカートリッジをメーカー別に仕分けしたり、個数買取不可の品は重量買取用の箱に詰めたりする地道な作業です。



事務局に届くインクカートリッジの仕分け・集計作業を、毎月 1~2 回行なって下さる長年ドナーでボランティアの中村さん

インクカートリッジの収集と送付上の注意事項

使用済みのインクカートリッジのみ有効です。未使用品やリサイクル品は無効で業者の買取が不可。

インクが残ったものや汚れがついた品も無効です。

包装袋(箱)から出した状態で送付して下さい。

個人名義の奨学金にしたい方は、一度に 400 個以上を送付し、送付状に「個人名義希望」と明記してください。個数買取は通常 1 個 30 円ですが、業者が無効と査定する品もかなりありますので、余裕を持って多目にご送付ください。

当センターの礼状が不要な方は、送付状に「礼状不要」と明記してください。eメールのお礼状希望の方はメールアドレスを明記してください。

空き箱活用の収集箱に貼る収集チラシを電子ファイルで送付可能ですので、お申し込み下さい。

事務局活用リスト 16 番参照

創立 20 周年記念式典を開催

ドナーと元奨学生が涙の対面

昨年 11 月 30 日、日本民際交流センター創立 20 周年記念式典が東京・広尾の「JICA 地球ひろば講堂」で開催されました。タイからダルニーさんと奨学生 1 期生のツェンチャイさん、ラオスからは 1 期生のダオサバイさんと 2 期生のダオチャイさんが来日して式典に参加。ツェンチャイさんとダオチャイさんは、式典で奨学金を提供してくれたドナーの方と対面しました。参加者は 137 名。タイ大使館とラオス大使館からは、それぞれ公使が出席され、祝辞をいただきました。また、ドナーを代表して作家の阿刀田高氏からも祝辞をいただきました。



ツェンチャイさんがあいさつを終えると、客席から朝比奈利一・桂子夫妻が壇上に上がり、感動のあまり泣きじゃくるツェンチャイさんを抱きしめ、「支援を有難うございました」「立派に成長したね」と声を掛け合いました(写真左)。朝比奈さんは 89 年、90 年にツェンチャイさんを支援しましたが、その際に一緒に送られてきた写真を見て以来 16 年ぶりの初対面となりました。続いてラオスの元奨学生ダオチャイさんがあいさつし、彼女を支援した金濱靖子さんが壇上に。金濱さんは 9 年前に証書と一緒に送られてきた昔の彼女の写真を見せて、初対面を喜び合いました(写真右。右側の男性は通訳を兼ねたラオス事務局長代行)。

また、ダルニーさんはスピーチの中で、子ども時代を振り返りつつ、次のようにあいさつしました。「幼い頃、家族全員に行き渡るほど十分な食べ物はありませんでした。当時、1日3食分を1匹の魚で乗り切ったり、一個の卵にたくさんの水や野菜を加えて料理をしたりして家族全員で食べました。なぜ私の家族は貧しいのか、とよく父に聞きました。父は一生懸命勉強して、できる限り高い教育を受けるよう努力するのが私たちの生活を良くする唯一の方法だと言ったものです。奨学金のお陰で勉強でき、今、タイ事務局で子ども達のために働くことができている幸せです」。

協力企業紹介

『学びごと』はすべての夢と希望の原点
株式会社毎日コミュニケーションズ海外事業部(マイナビ留学)

当社海外事業部では、海外留学サポート事業を通じ、日本から海外へ留学したいという夢や希望をもった人たちに、その夢を実現して頂くためのお手伝いをしています。毎年多くの人たちが海外留学することで夢や目標を実現させていく姿を見て確信していることがあります。それは『学びごと』という機会はすべての子どもたちに与えられなくてはならないということです。そして同時にすべての夢や希望の原点であるということです。裏返せば、学びの機会すら与えられないということは大きな悲劇であるということです。

海外留学は最近では非常に一般的になり、身の回りには留学経験者が必ずいるという社会になってきています。また、気軽にかつ短期でも海外留学をすることができるようになりました。しかし、1年間の海外留学で250万円から300万円以上は最低でもかかる驚沢な学習方法です。

私たちは「ダルニー奨学金」の存在とシステムが、それら留学費用のわずか1%程度の費用でひとりの子どもが1年間の教育を受けることができることを知り、ショックを得たのと同時にぜひ協力をさせて頂きたいと思っていました。

私たちは世界各国に800校以上の教育機関と提携しています。それが、それら提携校の協力も得て、当社から留学する学生さんからの要請があれば、授業料の1%に相当する額をこの「ダルニー奨学金」に寄付させて頂く活動を2007年末から開始いたしました。留学することで自分だけではなく、貧しい地域の子もたちが同じように学ぶ機会が得られ、将来の夢や希望を同じように描くことができるのです。こんな素晴らしい教育システムは他にはありません。

これから学びごとを通じてひとりでも多くの子どもたちの夢や希望を実現させるお手伝いができればと思っています。留学する際にはぜひ「ダルニー奨学金」に協力したいとお申し出下さい。



クリック募金のスポンサー企業として支援するカンボジア奨学生達の写真と証書をもつマイナビ留学のスタッフ

マイナビ留学

<http://ryugaku.mynavi.jp>

ベリーダンスショーでタイの学生を支援

P.U.R.E.Tokyo 大関基子

「1年1万円でタイの子を援助できるみたいよ」と朝日新聞を見た母親の声がきっかけでガルニー奨学金を知りました。他の支援方法と違う点は、自分が提供したお金がどこの誰に届いているのか、ハッキリ相手の顔が見える支援。そこに魅力を感じ、ドナー登録をして数年が過ぎました。登録をきっかけにタイ語を学び、タイ語の先生と東北地方を訪れた際には、当時支援していた学生が通う学校に足を運ぶという貴重な体験も出来ました。

最近ガルニー通信で「チャリティ英会話」や「チャリティーコンサート」で得た収益を寄付している活動を目にし、自分でも、単にドナーとして協力するだけでなく、他の手段で協力できることがあるのではないかと考えていた矢先、自分が所属しているダンスコミュニティ：P.U.R.E.で初めての大規模なイベントを開催することとなり、寄付先にガルニー奨学金が選ばれました。

2007年11月11日(土)、初めての大規模イベントでありながら、予想を上回る盛況ぶりです、



場内は沢山の皆さんで埋め尽くされ、パフォーマーとお客様からの「愛」で一杯になった暖かい雰囲気になりました。20人以上で行なう群舞、グループダンス、太鼓の生演奏に生歌とバラエティーに富んだパフォーマンスの数々、そしてイベント趣旨に賛同してくれた著名なゲストダンサーの方々の華麗な舞は全約2時間に及びました。

タイの学生6人が3年間勉強できる奨学金を集めることが出来たのですが、このイベントをきっかけにガルニー奨学金についての理解も深まれば大変嬉しいことです。そしてなによりも夏に報告書を見るのが今からとても待ち遠しいです。

P.U.R.E.は癒しと平和を目的にダンスと音楽を愛する気持ちを世に広めようと、ダンサーとミュージシャンが集まって出来たコミュニティでパフォーマンスによって得た収益を恵まない人々を支える団体に寄付しています。

<http://www.puretokyo.org/>

“人生が変わった”94年タイ研修旅行

山梨英和中学校出身 渡邊奈美子

ガルニー奨学金と出会って、人生が変わったのはタイの子どもたちだけではありません。私もその1人です。



中学3年生の時、タイ研修旅行に参加。右から7番目が渡邊さん

私は1994年に山梨英和からの初参加者として、ウドンターニーに行きました。当時中学3年生だった私は、中学や高校へ行くことに対して何の疑問

も持っていませんでした。しかし、タイでは学校へ行くことが当たり前ではないことを知り、大きなショックを受けました。「私と仲良くなったあの子は高校に行けないかもしれない」。そう考える度に涙があふれてきました。貧富の差という大きな壁を目の当たりにし、お金も技術もない自分に何が出来るだろうと悩んだ末、出てきた答えは「学校に行きたくても行けない彼らの分まで一生懸命勉強して、学んだことを将来タイの人々に還元すること」。そう心に誓い、国際協力の道を歩み始めました。高校時代からNGO活動を始め、大学でも国際協力について学び、マニラのスラムでインターンをするなどして視野を広げていきました。

高校1年生から始めた奨学金支援の1万円は、お年玉やアルバイト代から出していました。少ないお小遣いの中から奨学金を出すことは大変でしたが、その分、お金の価値を知り、学べるこの意味と責任を学ぶことが出来ました。

今も働きながら子どもの権利の実現を目指すNGOで活動しています。そんな私を支えているのは、あのとときのタイでの誓いです。教育の権利など子どもにとって当たり前のことが保障された子

どもの権利条約の実現を目指して、特に日本の中・高校生に、世界の同世代の子どもたちの置かれた状況を伝えていきたいと思っています。

途上国の人々の役に立ちたい、その夢を叶えるため、私もアジアの子どもたちと共に学び、がんばっていききたいと思います！



2000年タイを再訪し、渡邊さんが支援する奨学生と対面

タイ研修旅行のごあんない

5 月研修旅行は、タイ東北地方のコーンケン県を訪問します。同県は、首都バンコクから北東に 450km、広大なコラート高原の中央に位置し、国立公園や森林公園が広がります。また、国内有数の大学「コーンケン大学」や地方開発センターが開設され、地方モデル都市として注目される地域です。（*コーンケン大学大学院では、当センターが実施しているラオス教師養成事業の奨学生が留学生として学んでいます）

同県の奨学生をご支援いただいている皆様、また新規で奨学生をご支援いただく方はふるってご参加ください。（*新規支援で 5 月研修旅行に参加される方は、訪問先の中学校またはその近隣の中学校の奨学生を支援することができます）



昨年の参加者の声

- ・子ども達の笑顔が素晴らしく、純粋で、苦しい中でも将来の夢をしっかりと持っていて感動しました。
- ・村をあげての歓迎に感謝！

実施要領（予定）

日 程：2008 年 5 月 24 日(土)～31 日(土) 7 泊 8 日

訪問地：タイ・コーンケン県及びバンコク

参加費：一人 170,000 円（成田からの往復航空券、団体での全交通費・宿泊費・食費・通訳費、保険料。但し、航空券に付帯する空港使用料、航空保安料、燃油特別付加運賃は含みません。08 年 1 月現在、付加運賃は 16,800 円です）。他に、バンコク集合・解散コースもあります。

資料請求は 3 月 31 日(月)まで。申し込み締切りは 4 月 11 日(金)です。

郵便：ご自分の宛先を明記し 80 円切手を貼付した返信用封筒を同封の上、事務局までご請求ください。

電子メール：info@minsai.org まで、メールタイトルに「タイ研修旅行」と書いてご請求ください。資料は電子メールで送信します。

タイ料理研究家、チャリティーパーティ開催：17人の中学3年間分のタイ奨学金に

2007 年 10 月 19 日、キハチ銀座店で、当センターの長年ドナーでもあるタイ料理研究家の氏家アマラー昭子さんが代表を務めるアマラズ・キッチン(タイ料理教室)の主催で、チャリティーパーティが開催されました。協賛は、当センターに「タイの台所」という人気商品を毎年寄付してくださっている(株)アライドコーポレーション。民際センターがイベント等で販売する同商品の代金を、同社名義のタイの奨学金にさせていただきます。ちなみに同社代表取締役の氏家勇佑さんは、昭子さんの息子さんです。

タイに長年住んでいたことでタイ東北地方の貧しさを知っている昭子さんは、「タイ料理を通じてタイに恩返しをしたい」という気持ちで今回のチャリティーパーティを含め、過去にも同様のパーティを開催してきました。毎回、利益をタイの子どものための奨学金として寄付してくださっています。

今回のパーティには約 150 人の方がたが参加してください、美味しいタイ料理に舌鼓を打つだけでなく、クジ引き抽選会で複数企業からの協賛品を当てた方がたからの喜びの声が会場いっぱいにあふれていました。参加者全員へのプレゼントも用意されており、主催者と協賛者の細やかな心遣いが感じられた素晴らしく、かつ意義のあるチャリティー・パーティでした。当センター広報担当者もパーティにお招き頂き、奨学金の活動紹介をさせていただきました。



チャリティーパーティでのアマラズキッチン代表の氏家アマラー昭子さん(写真右)。(株)アライドコーポレーション代表取締役の氏家勇佑さん(写真左)
www.allied-thai.co.jp

創立 20 周年記念事業・日タイ修好 120 周年記念事業

タイ・ラオス・日本の中学生による生活文化交流

～ 出会い、理解し、誓いあった 9 日間～

タイ・ラオス・日本の中学生がタイ東北地方に集い、寝食を共にしながら相互理解を図る同事業は、日本から 13 名、ラオス 12 名、タイ 17 名の生徒・教師が参加しました。これは創立 20 周年を記念して計画されたものでしたが、偶然にも昨年は明治政府とタイ政府が締結した「日タイ修好宣言調印」から 120 周年に当たり、両国の記念事業の 1 つとして認定を受けました。また、青少年の健全育成を図る事業を対象とする助成金を 3 団体（特定独立法人国際交流基金、財団法人三菱銀行国際財団、全日本社会貢献団体機構）から受けました。なお、実施に当たっては、3 カ国の中学校、保護者の方々から多大なご支援をいただきました。

日程：2007 年 7 月 28 日(土)～8 月 5 日(日)

場所：ナコーンパノム県バン・ワンタムア村

参加者：

日本 矢部村立矢部中学校(福岡)生徒 3 名、教師 1 名
山梨英和中学校(山梨) 生徒 3 名、教師 2 名
厚木市立陸合東中学校(神奈川)生徒 3 名、教師 1 名

ラオス モウンソウム校 生徒 5 名、教師 1 名
クアドゥン校 生徒 5 名、教師 1 名

タイ バン・ワンタムア校 生徒 4 名、教師 2 名
バン・ポータック校 生徒 3 名、教師 2 名
タンナムジャイ校 生徒 3 名、教師 3 名

出 会 い

3 カ国からの参加者がメコン川を望むホテルに集いました。日本からの 1 名を除いて、海外渡航は初めての子ども達は緊張と興奮で一杯です。明日からは 1 軒の家に各国から 1 人ずつの民泊。言葉は通じるだろうか？仲良くなれるだろうか？不安が募ります。

理 解

より深い理解を図るため、生徒たちは 3 つの身近なテーマ「家族」「教育」「環境」についてプレゼンテーションしました。そして各国の違いや共通点を理解するとともに、自分たちが抱える問題の解決のヒントを他国の発表に見出しました。



左：国境を越えて手をつなく中学生達 右：民族衣装で

テーマ[家族]から各国の発言

日本：家族は快適な家で一緒に住んでいるが、両親は仕事、子どもは塾や習い事が忙しくて食事バラバラ。
タイ：親が出稼ぎに出なければならず、そのせいで離婚や蒸発が増え、子どもはとても寂しい。日本ではどうして祖父母と一緒に暮らさないの？子どもは両親の手伝いはしないの？

ラオス：貧しいけれど家族と一緒に助け合って住んでいる。しかし親が病気になれば子どもは学校を辞めて働かなければならない。親は命をくれた恩人だから、ラオスの子どもは親の恩に報いたいといつも思っている。日本の子どもは忙しくて親を手伝えないが、勉強が役割だと思う。

日本：物が豊かでも幸せとは限らない。これからは家族のことを今まで以上に考えて生活したい。

誓 い

私達、タイ・ラオス・日本の中学生は一緒に生活して、お互いにたくさんのことを学びました。

「家族」については、自分達の家族を大切にして、他の社会を知り、お互い思いやりをもって助け合うことが明るい社会を作ることを知りました。「教育」については、学校に設備が有るか無いかよりも、教育を受ける私たちの気持ちが必要なのだとことを知りました。「環境」については、地球温暖化や環境破壊は、特定の国の問題でも責任でもなく、全世界で解決しなければなりません。ですから、私たち一人一人が自分にできることを見つけて取り組んでいこうと考えました。このように、短い期間でしたが、お互いの共通点や相違点を見つけ、話し合うことで、私達は多くのことを学び、考えることができました。ですから、これからも連携して、助け合うことによって、自分の家族や国を良くし、明るい平和な世界を作りたいと思います。（「タイ・ラオス・日本の中学生会議」アピール）



最終日は涙と笑顔の記念撮影になりました。

佐藤さんは高校時代にタイ東北部に短期留学し、タイが大好きになりました。しかし、同時に都市部と農村部の貧富の差を目の当たりにし、「大好きなタイに困っている人がいるのなら何かしたい！」と、アルバイトをしてガルニー奨学金支援を始めました。さらに、高校時代に友人 33 人とカンパしてラオスの子ども 2 人を支援。大学入学後は国際事務局で最初はボランティアとして、現在はインターン生として働いています。

学生ボランティアによる街頭募金で、4 万円が奨学金に

早稲田大学 1 年 佐藤詩織

2007 年 10 月に大学生ボランティア 6 人で街頭募金を行いました。募金活動をするきっかけは、民際のスタッフの方に「佐藤さん、若い人たちで何か支援活動やってみない？」と声をかけられたからです。街頭募金を選んだのは、今すぐ私にできることが他に思いつかなかったから、そして、「街頭募金やろうかと思ってる」と話したところ、「ステキな思いつきじゃん！！」と思いがけず乗ってくれた友人がいたからでした。

吉祥寺での街頭募金当日、予想外に活動を楽しんでいる自分が、そして仲間がいました。おばあさんが 1,000 円も寄付してくれたのに喜び、小さな子が 10 円玉を持ってきてくれたのに心温まり、チョット怖そうなお兄さんが恥ずかしそうに寄付してくれたのに感動しました。たとえ寄付はしてくれなくても、前を通った人がちょっとこっちを見てくれたら、もしかしたらあの人はこれをきっかけに、民際を通してでなくても何かしら国際協力を始めてくれるかもしれないと嬉しくなりました。道行く人に無視され続けて少し落ち込むこともあったけど、それよりも寄付してくれたおじさんの「頑張れよ！」という一言の方が印象が強かったです。

結局、4 日間で 48,154 円集まりました。内、4 万円は奨学金にし、残り 8,154 円は私と参加者の大学生 1 人が民際の 07 年 11 月タイ研修旅行に行った際に、タイで学用品を購入し子ども達にプレゼントするのに使いました。

今回の街頭募金を通して、人びととの小さな出会いにいっぱい幸せをもらいました。また、私にとってはボランティアの仲間との絆が深まったのも嬉しかったです。2008 年に届く奨学生の証書を皆で見るのが楽しみです。そして、今後ともこのメンバーを中心に色々なボランティア活動ができればいいなあとと思います。



吉祥寺での街頭募金の様子



募金を数える佐藤さん(右端)とメンバー



タイで中学生(左)に学用品を手渡す佐藤さん(右端)とメンバー

タイ東北地方への個人旅行についてお願い

現地担当の先生が困っています！

タイ奨学生をご支援されているドナーで、個人で現地を訪問して奨学生に会いたい方は、東京とタイの事務局を通じて奨学生の学校と村にご案内する手配をしております(手数料として 5000 円かかります)。しかし、個人旅行の回数を重ねて現地の担当者と携帯電話番号をやり取りするようになると、事務局を通さず個人で直に担当者と連絡を取って訪問される方がいらっしやいます。事務局経由の場合、県教育委員会を通じてお願いするので、公式の仕事の扱いと見なされますが、個人的に連絡されると「私的な世話」と見なされ、代休も取れず、個人の用で学校を抜け出さなければなりません。こうした事情をご理解いただき、お手数ですが、個人旅行をする際は、東京・タイの事務局を通じてお出かけください。

ボランティア 大募集！



現在、入力・Web・DTPボランティアを募集しています。ご協力頂ける方は、事務局の窓口までメールにてお問い合わせください！他にも特技をお持ちの方は是非ご連絡を！

入力ボランティア： 経験不問、事務所勤務

Web/DTP ボランティア： 要経験、在宅勤務

連絡先： aiki@minsai.org

(件名に「ボランティア希望」と入れてください)

連絡会ニュース

新潟ラオス研修

赤石 隆夫（新潟ドナー連絡・世話人）

新潟の高校先生グループ「燎原の火」12名に随行して新ダ連4名の今回の研修地はラオスの中部、カムアン県ハトシエンジー村です。ラオス事務局の支所がある県都ターケクから車で1時間半ほど南下したセバンファイ川沿いの比較的大きな村です。12月28日、沿道に並ぶ村人と生徒の大歓迎を受けて村への入場です（写真1）。同じ低地ラオ族だからでしょうか、イサーン（タイ東北地方）村と錯覚させるほどに雰囲気似ています。

貧弱な教育環境の中、先生は奮闘するけれど・・・

一見豊かな村の生活にも思いましたが、その後訪問した学校での教育状況はイサーンとは比べ物になりません。乏しい教育環境で奮闘する先生。学校の状況は私の知る山村部と大差は無いように思えます。低学年では小さな黒板を机の上に置きノート代わりにしています（写真2）。これでは帰宅後復習はできません。授業は先生のかげ声への唱和、黒板への板書が主たる内容です。いずれにしてもこの貧弱な教育環境で子供たちを授業に集中させるのは至難の業でしょう。現状で今ある教材で教育レベルを維持しようと奮闘する先生たちには頭が下がります。

学校敷地内にはラオス事務局が手塩にかけた「一校一品」（ ）の畑がありました。赤ワケギとコリアンダーの畑です（写真3）。生徒と一緒に収穫し、食事時に頂きました。ほんのり甘い新鮮な風味です。少ない教育予算の補填には有効な事業です。また、同県内のポーサイ村の民衆方式の新校舎と、ナマズ養殖事業も拝見しましたが、ターケク支所のスタッフの工夫と努力、地味ですが着実な成果に感心するばかり。

支援する奨学生宅を訪問

一方、ダルニー奨学生の割合は全校生徒の20%にも達しています。そんな中、3人の奨学生の家庭を訪問しました。片親のみの3人姉妹の長女、両親が亡くなり祖母に養育されている男子、5人姉妹4番目のVan（写真4）。年上の姉妹と両親が野良仕事で家事を一手に引き受け勉強時間は限られるなか、Van（小4）は進級試験でクラス3番目だったとのこと。彼女の里親である我々「新ダ連」からも歓声が上がります。Vanは将来お医者さんになりたいと夢を話します。きっと家族や友達の病気を幾度となく見て来たからでしょう。病院は20kmほど離れた町にあるのみです。

3日間の滞在を終えた我々の村をあげての盛大な見送りでは、涙の別れが随所にありました。初めてラオスの奨学金の現場を訪れた高校先生たちの胸中に灯った種火がそのグループ名「燎原の火」のように広がる事を祈った研修でした。

奨学金の為替差額を利用して学校に助成金を提供するプロジェクト。各学校は無農薬有機農業や無料ランチの提供などを実施している。



写真1



写真2



写真3



写真4